

音読

長く親しまれている古文の文章の言葉のひびきを味わいましょう

年
名前

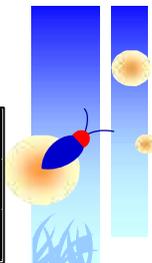
古文Ⅰ

枕草子

『枕草子』(まぐらのそうじ)は、清少納言によって書かれた平安時代の随筆(ずいひつ)です。随筆とは、筆のおもむくままに自由に見聞や感想、意見を書きつづる文です。

枕草子

清少納言



春はあけぼの。

はる はあけぼの。

やうやう白くなりゆく山ぎは、

やまぎは

すこしあ

少し明かりて、紫だちたる雲の

むらさ

くも

ほそく

細くたなびきたる。

なつ よめ つき

夏は夜。月のころはさらなり、

闇もなほ、蛍のおほく 飛びちがひたる。

やみ

なほ

ほたる

おおほく

ちがひたる

また、ただ一つ二つなど、

ひと

ふた

ほのかにつち光りて行くもをかし。

ゆく

おかし

雨など降るもをかし。

あめ

おかし

(秋は夕暮れ…、冬はつとめて…と続く)

〔解説〕

春は、夜明けがよい。しだいに白んでいく山に接する空が、ほのかに明るくなって、紫がかつた雲が細くたなびいているのがよい。

夏は、夜。月が出ているときは言うまでもなくよい。やみ夜であっても、ほたるが多く飛びかっているのがよい。また、ほんの「一、二匹が、ほのかに光って飛んでいくのも風情がある。雨が降っても風情がある。

読んだ回数 (で 囲む)	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	よく聞こえる	すらすらと読める	暗 唱
私の評価 (. .)				
先生の評価 (. .)				

(とてもよい よい もう少し)